

令和3年度 全国学力・学習状況調査の結果について

1 調査実施日 令和3年5月27日(木)

全国学力・学習状況調査は、「義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。」ことを目的として、文部科学省が実施するものである。

2 各教科の調査結果の概要について

ここでは、本校の調査結果について、本年度の結果をもとに、両教科に見られる傾向やそこから考えられることを述べる。

(1) 平均正答率について

表1のように、国語は85%、数学は78%であった。2教科とも平均正答率が全国平均を20ポイント上回る結果となった。また、全国の平均正答率と比較しても、国語が1.32倍、数学が1.36倍の平均正答率となっている。

以上のことから、いずれの教科においても、これまでの学習内容がますます身に付いており、基礎的・基本的な知識・技能とともに、それらを活用して課題を解決する力もおおむね身に付いていると考えられる。

表 【令和3年度教科別平均正答率】(%)

	国語	数学
本校	85	78
広島県	65	57
全国	64.6	57.2
本校/全国	1.32	1.36

(2) 今後の取組について

開校3年目の本校にとっては今回の調査が初めての調査となった。本校では国際バカロレア教育の枠組みを利用しつつ、学習指導要領に示された指導内容をしっかりと定着させていく教育活動を展開しているが、今回の調査結果を受け、今後もこれまでの教育活動の方向性を受け継ぎつつ、より精度や質の高い内容へとブラッシュアップしていくことのできる取組を展開して

いきたい。

具体的には、授業交流月間の、一層の活性化である。現在も年に3回の授業交流月間を設定して、教科の枠を超えてお互いの授業を観察し、相互に意見を交わしている。このことにより、本校は、自身が担当している生徒を多角的にとらえる機会に恵まれているといえる。そこで、他教科の授業観察を通して新たに気づくことができた生徒の特性をさらに引き出すことのできるような授業展開を構築していけるよう、授業改善の取組を進めていく。

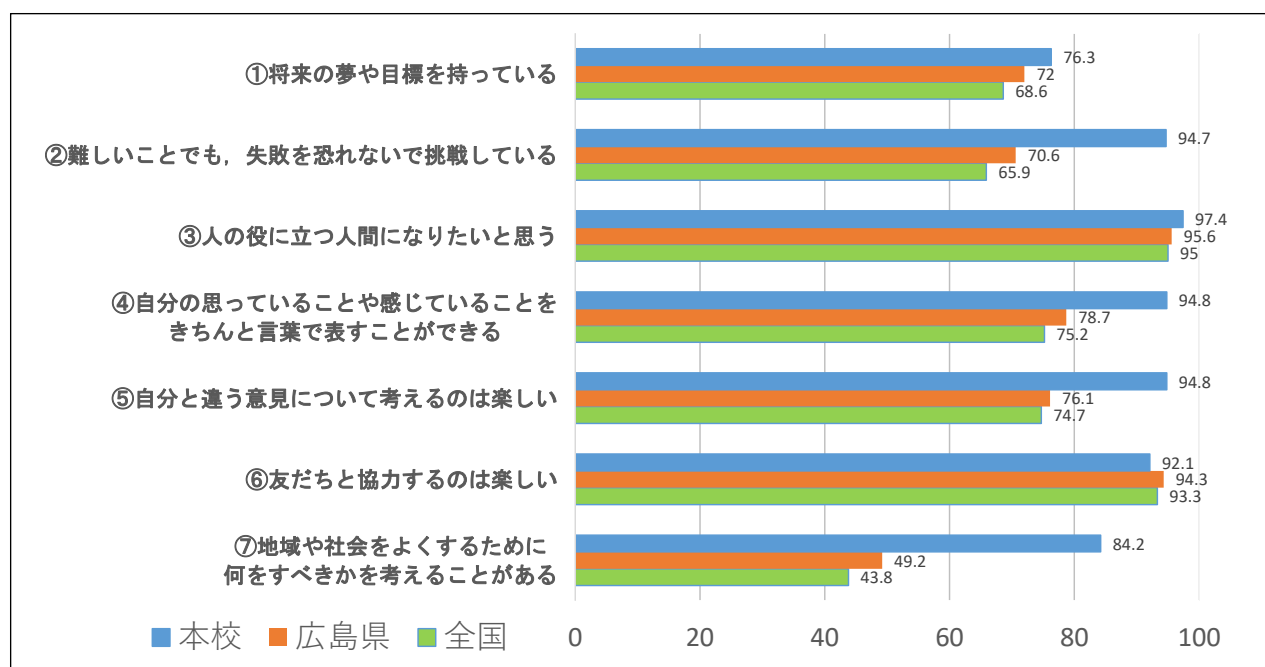
また、今回の調査結果を受けて、国やIB教育が推奨している「個に応じた指導」の展開も今まで以上に意識し、生徒一人ひとりが今後も確実に力を伸ばしていくことができるよう日々の教育活動を展開していく。

そして、これらの学習活動によって、様々な課題や局面にも柔軟に対応し、「よりよい未来」を創造していけるグローバルリーダーの育成をしていきたいと考えている。

3 生活や学習状況の調査結果の概要について

次に、生活習慣や学習環境等に関する質問紙調査の調査項目の中から、本校のミッション、ビジョン、ヴァリュー等と関連があると考えられる項目をいくつか取り上げ、県平均や全国平均と比較しながら、本校生徒の状況や特徴を分析し、考察する。

図【令和3年度生活と学習に関する調査項目(抜粋)】



※ 数値は肯定的な回答(「当てはまる」と「どちらかといえば当てはまる」を合計)をした割合(単位:%)

(1) 本校の状況や特徴について

図からわかるように、項目②や⑦については、広島県平均や全国平均を大きく上回っており、本校のビジョン「世界中のどこにおいても地域や世界の『よりよい未来』を創造できるリーダーを育成する」とも合致する、未来志向の意識をうかがうことができる。また項目②は「IBの10の学習者像」の中の一つ「挑戦する人」にも通じる質問項目であるともいえ、「答えのない社会」を生きていく上で必要とされる資質・能力についての自己認識を問う項目であるが、この項目についても広島県平均や全国平均を上回っている。加えて、項目④や⑤も広島県平均や全国平均を上回っていることから、コミュニケーション能力や他者と協働することへの意識の高さをうかがうことができる。

その一方で、項目⑥については、高い水準ではあるものの、広島県平均、全国平均を下回った数値となっている点には注意を要する。これは、先に述べた「協働性の意識の高さ」とはやや矛盾する結果となっているともいえる。ここからは、好奇心旺盛で見分を広げていくことに貪欲ではあるものの、自意識が高く、なかなか素直に他者を受け入れたり、認めたりすることに抵抗を感じる本校生徒の特徴が垣間見えているようにも考えられる。

項目③と⑦を併せて考えると、他者貢献の意識は、本校だけでなく、全国的にも高いことがうかがえるものの、全国的に、又は広島県全体としても、その意識がなかなか地域社会の課題発見・解決への模索といったアクションにつながりにくくなっているのではないかと推測される中、本校生徒の意識は比較的よく地域社会に向けられているということが出来る。「『グローバルな視野』と『地域に根ざした心』の双方を大切に」するという本校のヴァリューにも通ずる意識であるといえる。

(2) 今後の取組について

(1)を踏まえて、今後、一層他者とのコミュニケーションを図り、協働的に活動する場面を設定して、本校のミッション、ビジョン、ヴァリューを体現できる生徒を育成していきたいと考えている。本校では、次年度にはいよいよ留学生を迎える。今まで以上に多様な仲間と共同生活をすることになる。それはそのまま多様な文化的文脈を経験することでもある。これを機会に、例えば本校生徒と留学生とがチームを組んで取り組む地域密着型のプロジェクト学習を設定するなどして、本校生徒、留学生がともに視野を広げ、互いに知的好奇心を刺激しあい、双方が主体的に探究活動に向かうことのできる精神性を育成していきたい。

また、「全寮制」という本校の特徴を「強み」として、日常生活の中でも協働的に活動し、コミュニケーションをとることのできる経験を積み重ねていくを通して、お互いに尊重し合いながら高め合っていくことのできる「場」の設定を工夫していきたい。更に、そのような経験の積み重ねを通して「友だちと協力する」ことについての意識の改善も図っていききたいと考える。